"Laboro Kaj Emancipo"

Eldonas: Grupo "Laboro Kaj Emancipo"
Ĉe Y. TAKASHIMA
4—39, Nadakitadōri, Nadaku
KOBE, Japanio

Laboro kaj Emancipo ····
労働と解放

発行所　労働と解放社
神戸市灘区灘北通四ノ三九（高島）方
発行者　平沢貞太郎
編集者　高島洋
定価 20円

幽霊の如き存在
JC加入後のわが単組

鉄鋼産業には、鉄鋼労連という労働組合が存在することになっている。たしかに看板はあがっているし、われわれ組合員は毎月組合費を天引徴収されている。しかし鉄鋼労連がIMF・JC（国際金属労連日本協議会）に加入してから、その傘下にある私達の単組は大分おかしくなっている。それはIMF・JCが建前（経済闘争重点主義）としている賃金アップを充分に闘っていないからだ。職務給の導入は経営側のなすがまま、一時金も昨年から年間給与にしてしまったため、今年に入ってからの好況にもかかわらず、夏季の一時金は昨年決定したものを、そのまま支給されたにすぎない。

そのため組合員は、組合費をドブのなかにすてているのと同じだという。こんな組合なら無い方がましだと、ひそかに不満をかこい合っている。しかし、現在の組合役員をリコールすることは、即経営者に対する最も大きな抵抗で厚い壁であることもみんなが知っている。これが打破できない現状なのである。

むしろ組合役員の多くは、経営側と野合して反共工作に熱中している。たとえば一つの工場のなかに反共グループがあって（彼らはJCを支持し、JC加入を促進した。）経営者は、そのグループのメンバーを職場（現場）の中核として配置すると共に、一方組合役員にも入りこませるために権力援護している。

そのため組合の役員会では「選挙活動としては、今後候補者の推せんに当って（地方選挙）共産党を除外する」と決定したり、組合員が組合員にビラを配布する件について「組合員にビラを配布する場合には、事前にその内容を組合執行部に届出て、許可をうけなければならない」と決定して、われわれ組合員の表現の自由をおさえつけている。経営者と反共グループと組合が一体となっているように見えるのである。

また私には、これが国際情勢の反映のように見える。要するに共産党細胞を共産側の尖兵とすれば、この反共グループ（JCを支持している）は、米日独占資本の尖兵の如く見えるのである。

しかも彼らは、労働組合主義を標傍するJC支持者でありながら私のような労働組合主義者（サンヂカリスト）を「共産党よりなおたちの悪い奴」と職場で言いふらしているのである。

ところで先日、IMF・JCの古賀副委員長が記者会見している記事を見た。彼はJCを労働組合主義の正統派と称して次のように言っている。

「労働組合主義には、一つはプロフインテルンの流れをくむ左翼労働組合主義と、第二のインターの流れをくむ西欧的（民主的）労働組合主義の二つがある。社会運動にも二大潮流があって武力革命論はまだ社共両党に残存して労組に影響をあたえている。しかし、われわれは革命過程から見て民主革命は終ったと見ている。血のメーデー、火焔ビン闘争はすでに清算された筈である。残された理論は実力行使による政権奪取、ゼネストによる政権奪取が根拠として可能かということだ。これを理論的に肯定するか否かが先程の左翼主義と西欧的立場との差だ。この問題は第二インターの国際会議で論議しつくされている。第二インターでは政権獲得のためのゼネストは認めないとなっているが、しかし基本的権利が剝奪されたり、重大な社会的改革を必要とするときは政治ストを認めている。これがわれわれの正統派を自称する根拠だ」

しかし、彼の主張には最も大切なものが欠落している。欧米でも一九〇〇年前後からの労働組合主義（サンヂカリズム）には、反権力、自田連合という本質的な思想が一貫して流れていた。彼はそれについてふれていない。反権力の思想のない労働組合主義など気のぬけたサイダーのようなものではないのか。

またJCの運動方針そのものも明確ではない。資本の自由化に対し対策がなければならないと言っているが、資本の自由化のなかでの資本の合理化攻勢（労働人員、労働密度の問題）にどう対処するというのか。現在JCを支持し加盟している単産や単組の思想傾向から見て一体なにができるというのか（八幡労組、松下電器労組などの例を見るまでもなく）またいま世界の関心事となっているベトナム反戦についていかなる態度をとろうとしているのか。そこのところを明確にすべきである。でなければ労働組合主義の正統派などとはおこがましい。

裸になりきれぬ幹部
総評大会批判

総評の第三十四回定期大会は、七月十九日より四日間、東京文京公会堂で行われたが、本来の階級的立場を貫くか、あるいは現実的路線を導入するかの方針上の対立が組織統一問題にもからんできて、きびしい論戦が期待されたにもかかわらず、原口全鉱委員長の両派の意見をとり入れた仲裁的提案によって組織上の危機を一応まぬがれたかに見える。

原口氏の提案内容は

1、当面賃上げ、時間短縮で、全国的に共闘体制を進める。

2、既存の組織については、相互不可侵の原則を認め合い、未組織労働者の組織化でのみ競争する。

3、相互の政治路線を認め合う。

4、共産党はじめ、いっさいの政党の支配介入を排除する。

この提案は、観念的な論議よりも、共闘を進める行動のなかから組織統一を具体化してゆこうとする配慮によるものであろうけれども、全国金属の意見の如く〝くさいものにフタをした〟という要素も多分に見られるのである。

それよりもわれわれとして最も不満のある点は、組合幹部が自己の立場をきびしく見つめ、その困難さを正直に告白していないところにある。例へば政党の支配介入を排除することは、われわれとしても異存のないところであるが、政党の支配介入を排除しても、最近多発している経営側の労組に対する不当介入については殆んどふれられていないからである。単組によっては、経営側に完全に不当支配されている組合もあり、このような場合、組合幹部は殆んど自立意識を喪失してしまっている。そのような運動不能の状態を正直に告白していないから、総評の運動方針は、あたかも各単組が自立意識をもちつづけ、いつでも闘える組合として、その方針を展開しているのである。そこには現実と方針の間に、あきらかにギャップが存在する。

一方、全逓などは、そのギャップを逆用し、「階級的立場ばかり固執していては職場の中で孤立する」と言って、一つは職場に責任を転稼し、一つは産業の体質変化というものに殊更にこだわりその前提としての幹部自身が裸になって自己批判しなければならない点をほうかむりしている。おそらくこのような形でかりに組織統一したとしても問題が残るであろう。現にこの大会に於ても、資本側の合理化攻勢に反対して闘うことを決めながら、また職場では労働密度の重圧に日夜あえいでいるにもかかわらず、具体的な闘い方については論議せず統一問題のみを前面に押出している。このような態度こそ組合員の代表としての組合役員のあり方を忘却してしまっていることを、はしなくも露呈したものではあるまいか。

雑記

◎原稿の集りが悪くて、本号の発行もずい分おくれてしまった。それにしても本紙に対する各地の同志から暖い思いやりをいただいて感謝している。創刊号以来カンパをいただいた（関西を除く）方々の氏名をあげさせていただく。東京（高橋、平岡、萩原氏）名古屋（すみ、小川潜氏）九州（井原氏）

◎十月を目途に名古屋、京都、大阪、神戸をむすぶ労学交流集会の企画を検討中である。具体案ができ次第各地に連絡する予定なので、なるべく多くの人々の参加をねがっておきたい。

◎原稿不足で、予定より一か月以上も発行がおくれた。生前、交友の面で多くの人々に思い出を残されていると思いますので、次号第二面を同氏の追悼特集にしたいと計画しています。皆さんの御協力をお願いします。九月十五日までに高島まで原稿を送って下さい。

☆　☆　☆

アンケート（続）
君はどのような労組を望むか

壁

労働組合が要求を出して闘う場合、理事者側から頑強な抵抗を受けるのは当然であり、その壁を打ち破って勝利を得る為に、労働者はそれぞれの力を結集する。勿論その力が強固でなくては、なかなか目的を達することはできない。

ところが、その前面にはだかっている壁とは別に、われわれの囲りをとりまいているもう一つの壁、それは、組合指導部のつくっているものである。然もこれは、前者のようにストレートでぶつかることのできにくい厄介なものであり、丁度、人民がその鋭いほこ先でブルジョアジーを倒してようやくつくった新らしい社会に、もっともらしく出来上った第二の支配層を滅すことの、前以上の困難さがあるに似ている。

そしてこの組合内にある壁を取り除く道は、先ず問題をかかえた仲間をまとめるのは当然であるが、彼らと共に核となって闘う者は、けっして執行部に籍を置いてはいけないことである。闘いは一応執行部と連絡を保ちながらも、当該グループの対理事者側交渉に直接参加の形をとらねばならない。このことは、組合員に、労働者としての自覚を自からつくらせ、ひいては、指導層の幻覚によってくられた権威—壁を打ちこわす真の力となるのである。これは私が、執行委員をやり、現場の要求を闘った中で、最も強く感じた事である。

（すみぜんいち）

労組員の自覚

わが組合の現状を考えてみた。職場集会、正月からこちら、たった一度開かれただけ。集会の連絡は一時間前に放送で一度。集まったのは二十名足らず。せっかく用意したスピーカも必要なし。交代勤務で、その日の勤務者は約⅓、しかも土曜日、と言っても理由にならない。現在ここの組合員は二百七十名、あまりにもひどすぎやしませんか？

これが現在の状況、春闘で組合が一万円の賃上げを要求し、団交をはじめてから二ヶ月も過ぎる。その間一度も職場集会は開かれず要請もなかった。中には自分等の組合がいくら賃上げを要求しているのか全然知らない者もいる。

こんな調子では労組は資本側に抑えつけられるばかりだ。労組のおえら方が何か勝手にやってござる、などと言っているだけではだめだ。何よりも最初に、労働者の力と我々の生活は自分自身で勝ち取り守らねばならないと自覚をうながすことだと思う。

そうすれば、いわゆる労働貴族の連中も一般労働者大衆を単なる投票用紙と見なすわけにはいかないだろう。

そして、産業別労組のワクを破って労働者の大同団結を行なう。つまり労働者の自由連合。

その時にこそ、労働者が真に人間たり得るのではないだろうか。

わが理想の労組、それは労働者一人一人が真剣に人間として生きようと思い、団結する労組である。

（おがさはら）

—演劇評—

劇団「雲」の「ヘンリー四世」

もっと狂気を！

野田茂徳

ここ数年、新劇の舞台を観る機会から遠ざかっていました。数日前、久しぶりに劇団「雲」の「ヘンリー四世」を観ました。これはシェイクスピアのものではなく、ルイジ・ピランデルロ（一八六七—一九三六）の原作の「ヘンリー四世」（エンリコ四世」）です。（註　原題は「エンリコ四世」（イタリア読み）ハインリッヒはドイツ読み）ピランデルロの作品のいくつかは翻訳があり、また劇の方も「雲」によって上演されており、イタリアが生んだノーベル文学賞の受賞者としても知られている人です。

さて、幕が上がると、四人の若者が、議論を始めています。一人の新入りに対して、他の三人が自分たちの役柄を説明しているのですが、どうやら、それは神聖ローマ皇帝、ハインリッヒ四世の枢密顧問官のようです。しかし、彼らの議論の中で、自分たちが贋の枢密顧問官だというのでした。彼らの主人「ハインリッヒ四世」は二十年前の仮装騎馬行列で落馬した衝撃で、精神錯乱に落ち入り、その時以来、ずっと仮装していた「ハインリッヒ四世」だと思いこんでいるのでした。四人の若者たちは主人公の甥にやとわれた演劇青年たちなのですが、「ハインリッヒ四世」と調子を合せた仮装で、お相手を勤めるというのが彼らの仕事なのです。舞台は、別荘内を、中世風にしたてた、なにからなにまで、「ハインリッヒ四世」の伝説と時代にマッチしたものです。

二十年ぶりに、再会したくやって来た昔の恋人マチルデ、その娘フリーダ、そして主人公の昔の友人で、今ではマチルデの情人の男爵ティト、それと「ハインリッヒ四世」の狂気の診断にやって来た精神科医たちの勢ぞろいの中に、しかも集まったものたち皆が、「ハインリッヒ四世」に合わせた仮装をした中に、「ハインリッヒ四世」は登場してきました。「正気」の人間たちの演じる芝居は本当に芝居のつもりなのが、本気なのか——わが「ハインリッヒ四世」は「正気」の人間たちの仮装とへつらいの言葉に対して、鋭く射るような眼なざしで、彼らを凝視するのでした。

「正気」の人間たちは、その眼にうろたえ、眩暈を感じるのですが、いや、いや、これは「狂気」なのだ。自分たちの正体を見破ってしまっているようなあの眼、あの言葉——あれは真実だが、決して「ハインリッヒ四世」は「正気」ではないのだと己れに言い含めるのですが、彼らの中には、不安の影がさしはじめるのです。自分たちの正体に跳び掛ってくる、彼の言葉は、一体どこから飛びだしてくるのだろうか。わたしたちこそが「正気」なのだ、「正気」の人間は、あまりにも狂人の言葉や動作をまともに受けすぎるのだと、いうふうに自分の「正気」を頼りにするのです。彼らは自分の「正気」について一度も疑うということは、勿論しないし、また「狂気」を疑うこともしないのです。

昔の恋人マチルデは、過ぎ去った二十年前の時間の固定の中に立っており、精神科医はと言えば、狂人の類型による分類と一般的解釈を施すという具合でして、「狂気」の時間を過すと、彼の中には這入りこもうとはしないのでした。

われらの「ハインリッヒ四世」はすでに、数年前のある日、精神錯乱から回復していたのでした。その日から彼は、そのまま、あのカノッサの屈辱で有名なハインリッヒ四世の役を自覚して演じつづけて来たのでした。彼は狂人になって耐えて生きつづけて来たと言えます。彼の前で心にもない「正気」の人間たちの真面目くさった演技は、彼が精神錯乱から回復した日から狂人になることによって耐えて来たのとは違います。「正気」の人間の仮装が単に仮装であり、その下に日常の服があり、演技している顔が、つくられた顔であり、仮面である時、その下に素面があります。「正気」の人間のとり澄したつくられた顔に、彼は告発するように、言うのです。

「それが人生なのです」

われらの「ハインリッヒ四世」は自覚した狂人だったのですが、他の登場人物は無自覚の「正気」の人間なのです。演じられることに徹した「狂気」より定かなる無検討な「正気」が、わたしたちの心のどこかに引っ掛るかと問われれば、おそらくその尋問には「不安」だけが引っ掛って残るだけでありましょう。自分の「正気」が、「狂気」を排除しうるだけの定かなるものが、あるのか、ないのか、だれも疑ってみないとすれば、そのことほど「正気」というものの実在性を疑わしくするものはありません。

原作者ピランデルロは、結婚の数年後に精神分裂症になった妻と、彼女が死ぬまで生活を一緒にするのですが、ピランデルロの友人が、自分たちに親切につき合っているばかりでなく、狂気の奥様とも生活されているが、一体どちらのあなたが、本当のピランデルロなのですかと聞いた事があります。ピランデルロは、そのどちらも＜わたし＞なのですと。

生活のなかで、これから贋の＜わたし＞、これからは真実の＜わたし＞という具合に割り切って、人生を生きる習性を持ち得るような錯覚を持っている「友人」には、「そのどちらも」という返事が驚きに聞えたに違いありません。自分の中に＜贋のわたし＞と＜真実のわたし＞と二つの＜わたし＞を持つものか、それとも、それらは虚妄にすぎず、二つを使いわけている、その二つは両方とも「仮面」にすぎず、わたしの中に＜わたし＞は実在しないのかもしれないという疑いを「正気」の人間は持ったことがないのです。

ピランデルロが自分の芸術について、次のようなことを書いています。——

人生とは悲しむべき道化芝居だと思います。と申しますのは、人間は誰しも自分の中にひとつの欲求を持っています。勿論、なぜなのか、何のためか、どこから来たものか、知ることがないままにではありますが、絶えまなく、自からを欺こうとする欲求をもっていますし、しかもそのために一箇の実在（それが、それぞれ本人にとっては、実在であっても万人にとって決して同一のものではあり得ないような、実在）を創造し続けます。しかも、それが始終徒労であり錯覚であることを、思い知らされるのでありますが……。

これが書かれた二年後（一九二二年）に、エンリコ四世（ハインリッヒ四世）は書き上ったのですが、すでにその主題は、彼の中に生きつづけていたのだと言えます。

自分が己れについて、これが＜わたし＞だと思っている実在性は、どれほど確かなものなのか、他からみて別に＜わたし＞の像があるとすれば、それは虚像なのか。

＜わたし＞について様々の視角から、内から外からその実在を探ってみる時、すべてがその＜わたし＞であり、またすべてが＜わたし＞でないと出るはずです。

主人公にとってみれば、精神錯乱からの回復のあとなお「狂気」を演じることこそ、自分の実在をその中に創造するという＜わたし＞の発見であったのです。また、一方で「正気」の人間たちは、この狂人に調子を合せているだけで、演じる役に己れを没入させることもない、仮りの自分だと思っております。ところが、それは、演じることを強いている自分の現実の反映であることを忘れているのです。つまり、仮りの自分だと思ってやっていることの根拠になる自分は、いま演技をやっている自分でもあるわけで、そこで自分の実在を見失っているのです。

主人公の「ハインリッヒ四世」は、「狂人も「正気」であり、「正気」もまた「狂気」であるということを知っており、だから己れを徹することによって狂人として耐えて生きてきたのです。「正気」の実在を疑ってもみない仮面の＜わたし＞に、いつも＜わたし＞はどこにいるのかと激しく告発するように＜わたし＞の実在を探し求めるのです。

わたしたちの眼前で、あの「正気」の顔と二重映しになってくる「正気」の虚妄を数の続くかぎり上げ続けることができます。国家秩序にとって「正気」こそが、秩序の秩序たる所以であるが、その秩序に錯乱を引きおこすめんどうを引き受けるような口振りの革命理論をぶるその顔につけられた仮面、あるいは、その素面とであります。彼らは決してめんどうは起さない「正気」なのです。単なる、みせびらかしの狂気なのです。彼らは秩序にとって「狂気」は法度だと知っていて、「狂気」に徹することはないのです。いってみれば「正気」は秩序の仮面であり、「狂気」こそ反秩序であり、＜わたし＞を回復させるものなのです。

最後に、主人公ハインリッヒ四世を演じた芥川比呂志の迫力は、すざまじいものでした。まさに、この役者をおいて、他にこれほどこの役に成りきりうるものはないように、わたしには思われました。

（一九六七・六）

黒色自由労働者組合とA・C・労働者連盟の思い出

横倉富次

巷に消えた無名の市井人の列伝で、読者には恐縮だが、この青年達は少しも利己的な野心も抱かず、ただ一筋に人間社会がより自由に平等になるために努力した革命の際には尖兵として街頭に屍を晒すとも侮ない覚悟で日々を自由労働者として暮していたのだ、了承されよ。

黒木、熊本県の産、眉秀で色黒けれど実青年、憂黙、一日中に数語を発すのみ、酒に酔ても酔態の表現法を知らず、アナキズム研究は熱心であり朴訥誠実であった。私は黒木と同志勝が酒に酔って泥パイと喧嘩し逮捕されかけたを救援に行き捕縄を解いて勝を逃がしたが、多勢の泥パイに包囲され捕縛され鳥井坂署の豚箱入をし、泥パイ部屋で徹底的に焼を入れられた。

—悪くすると公務執行防害で起訴か、軽くて二十九日かと、観念していると、「十日間の拘留」と司法主任に云い渡された。この男は熊本県人だったのだ。

「熊本県人に貴様の如き不送不思の輩ができたかと思うと県人として恥かしい、何としても改心せい」との訓論に対し、「見解の相異」

デカ部屋リンチの際も十日間の留置場に於ける態度も私より遙かに立派だった

工藤秀剣、青森県の産、六尺の大男、ゲジゲジ眉でドングリ眼の戦国豪傑の如き面構いなれど笑うと無類な愛興がある。大男総身に知恵が何とやらだしアナキズムの造詣は薄いが、その人の良さから同志として交ていた。秀剣当面の目的は芸者を抱く事であったが、未遂を残念がっていた。彼の長所は同志愛に厚く、リヤク屋になりきれぬ人間性だ。柔道五段に匹敵する体力ありと自称していた。

有名な魚藍坂のボル相手の大乱闘には三メートルの梯子を振り廻して十倍の敵から同志を救った武勇伝は当時の語り草であった。

さて、次は野蛮人社なる思想団体なるものからAC労働者連盟に参加した人々の紹介をしよう。

生野、野牛の如き青年。常に口づさんでいたのは、東海の小島の磯の白砂に

我れ泣き濡れて蟹とたわむる

余り働かない、細々とリヤクをやり糧を得て人に迷惑は懸ないようにしていた。拘留を嫌悪し、検束の途中にパイを突き飛して脱走する特技ありパイには睨まれていた。柔道初段の虫なれど余り腕力を振はなかった。酒は強かった。酔ても矢張り啄木を低吟するのみ。

堀田正一　「日常闘争、階級闘争」の必要性を是認し、ボル臭かった上に文学青年的で同志間で人望はなかったが、矢張好青年であり、後年ボル陣営に走り文学に専念し「パンテオンの丘」という小説を上梓している。

去る安保闘争の時、私は黒旗を立て六月行動隊と共に全学連に合流し主首官邸入口の道路に坐り込みしていたら見物の群衆の中から堀田が出て来て、懐し気にそして、（まだ、横倉はアナキストなのか）という顔つきで見ていたので、「堀田、今、何所に居るのだ」ときくと「小松川の方に住んでいるよ」と答えた。だとすると矢張りジッとしていられないので出て来たのだろう……組織から放れているので群衆の一人として見物していたのだろうか。当時の人間で逢えた僅かな人間の一人だ。

堀田正一よ！　傑作をものして呉れ。

（つづく）

海外通信

◎オランダ

〝労働と解放社〟の諸君へ!!

アムステルダムに設立されている社会学研究所では、社会学の研究に重要とみなされる雑誌、新聞、書籍その他の刊行物のコレクションのため諸君に申し出るものである。そして、それらのコレクションは研究生に自田に利用されるものでもある。

吾々の図書室には、現在およそ三二万五千冊の本、千四百以上の定期刊行物、及び数多くの貴重な記録の類を有している。

諸君の〝労働と解放〟が社会学の研究にとって重要である事は明白であり、吾々のコレクションにそれを加える事が出来るなら、幸いである。

吾々は出来るかぎりコレクションを完全なものとするため、諸君がすでに発行された全部のバックナンバーを吾々に送られる事を希むものである。

諸君の協力を前もって〝有難う〟と感謝する。

六月二六日、アムステルダム、社会学研究所

◎フランス

現在、フランスでは、ド・ゴールがカナダでまきおこした〝自由ケベック万才〟のこっけいな話で持切りである。

パリの各紙は、いち早く論評を提載しているが、ド・ゴールをこっぴどく批判しないのはコミュニストだけの様である。

吾々アナキストの見解は〝ド・ゴール支配が、すでに下り坂にあるということ、そして彼が次期政権獲得のために、共産党に取り入ろうとしている事であり、共産党は、八月一日に予定されている鉄道従業員のストライキをつぶそうともくろんでいる。

ド・ゴールは、共産党とすべての観点で一致しているかの如く振舞っている。

七月二八日パリ　R・B